Biggerの恐怖と人間性の追求

河　越　　玲

Richard Wright（1908—1960）と彼の文学テーマとも言える恐怖感は，切り離すことができない。Wrightの幼年期の生活は自伝的作品 *Black Boy*（1945）に見られる通り，幼い時からの恐怖感が，成長とともに強まっていったのである。白人と黒人の人種差別を，暴力によって教えこまれ，常に白人から生命を脅かされたりして，黒人独得の知恵が，生み出されたのである。南部の全てが，黒人にとっては恐怖的雰囲気のみなぎった世界なのだ。恐怖と暴力とが，Wrightの精神に必然的にしみこんでいった事は，次の言葉からも理解できよう。

> White men killed the black men because they could, and the black men killed the white men to keep from being killed.(1)

> "The white folks ain never gimme a chance! —— They take yo lan! They take yo freedom! They take yo women! They take yo life!" (2)

こうした生活に基礎を置いたWrightの作品は，直接白人に対する反抗という形をとらず，白人からの防衛の形で，内面思考に向けられた。New Negroの自律精神を反映させた小説 *Uncle Tom's Children*（1938）には，古典的，隷属的な，Uncle Tomの忍従の時代から脱した，次の世代つまり積極的かつ自主的，戦闘的New Negroの姿が見られるが，この作品にも人種的恐怖感が，その底流をなしていると言える。そしてこの登場人物の黒人が，非人間ではなく恐怖を持った人間なのだと，逆説的に社会に訴えているようにも見られる。

Wright の恐怖と暴力の傾向をそのまま受け継ぎ，またアメリカ資本主義社会の，矛盾した性格を暴露している作品が *Native Son* (1940) である。この作品はWright の作品中「恐怖と暴力というテーマが最も成功している」とも言われている。

Wright の恐怖に対する抵抗の態度は，個人的なものにとどまっている。人種に限らず，人間としての権利を主張するというわけでもなく，かといって黒人同士を組織化し，白人の暴力に抵抗しようという主張でもない。あくまでも消極的なその抗議は，恐怖感と劣等感につきまとわれ，敗北感と自我沈殿，あるいは相互理解の拒否という性格のものである。この姿は Bigger Thomas の姿勢であるとも言えよう。この Bigger Thomas こそ，アメリカ社会が生み出し，その環境の中で育った「土地の子」なのだと，Wright は主張している。Biggerは恐怖からのがれ，ひたすら自由に生きたいと望む。しかし Bigger の自由が，社会のすべてを拒否することで実現した所には，一般社会と分離した異常な立場を見るのである。

Bigger Thomas は20歳の黒人青年である。彼の様々な行動から，生まれて以来，意識の中に不満の蓄積がなされていたと推測できる。黒人としてのこれまでの生活は常に，白人からの強い圧迫を受けていた。それゆえ白人と言うと，Bigger は条件反射のようにおびえ，恐怖するのである。自分をふりかえることにも恐しさを感ずるのは，自分の一部にどうしてもぬぐいきれない，白人の存在があるからだと言えよう。この存在に劣等感を持ち憎悪するのだ。この Bigger の性質と対象的に Old Negro の典型とも考えられるのが，彼の母の姿である。彼女は白人からの外的，内的圧迫をすべて神の意志と考え，来世の幸福の為に，喜んで苦しみに耐え忍んでいる。信仰で救われると信じ，ひたすら祈るのである。Bigger はその姿を見るにつけ，反発を感じるのであるが，彼は白人の存在を常に意識し，恐怖し，憎悪するという悪循環を，どうすることも出来ずに繰り返し続けていた。Bigger の恐怖が，はっきり表われている幾つかの出来事においてそれぞれ特異な黒人意識を見ることが出来る。

仲間4人と白人の店を襲う計画は，最も良く内面恐怖を示していたと言える。しばしば黒人の店に，強盗に入っていたBigger達は，黒人同士という事で，いくら警戒が厳重であっても精神的には圧迫など感じなかったのである。その上白人警官も，黒人同士の事ならとりたてて調査もしないのである。しかし問題が白人と関係してくると事情は全く異なってくる。警戒という面では，黒人の店よりはむしろ楽に襲えるのであるが，襲う側，つまりBigger達の精神に，恐怖という圧迫感がのしかかり，実行を鈍らせるのだった。黒人としてのタブーを犯すこととなり，行動を起こしていない今でさえ，強く意識化されている白人から，この強盗が実行に移されれば，どのような結果を引き起こすか，はかり知れないのである。直接に白人の怒り，憎悪が力となって向かってくることを考えると，Bigger 達に二の足をふませたのだった。黒人の内面に深く根ざした無限の白人への恐怖と，警官とは言っても，人種差別をはっきり示している事から，Wright のアメリカ社会組織への批判すら感じられる。容易に金を得たいという願望からこの計画は進められたのであるが，これはBigger をはじめ，仲間一人一人の頭に恐怖を抱かせていたのは当然である。しかし仲間であっても互いに，恐怖感を他人に悟られまいとする一種の自尊心があり，この計画は自尊心の波に乗って実行の方向へと向けられたと言える。この波の流れを止め乱したのが，Gusの沈黙であった。この沈黙が恐怖を一同の心の中に呼び起こし，増大させる事となった。恐怖感を最も強く感じたBiggerは，自分の感情を押し隠し，無関心さを装っている事が出来なかった。それゆえ実際には白人への恐怖を，沈黙し続けるGusに，憎悪という形で転化してしまった。しいたげられた黒人だからこそ，自分の恐怖や圧迫感を，身近な他人に転化し，憎悪するという異常心理が見られるのではないだろうか。この時のBiggerはもはや自制心もなくなっていたと考えられる。決行時間が近づくにつれて，精神の不安定さも手つだって，異常な心理の複雑さを見る事ができる。皆を扇動しておきながら，事がここに至ってから，内心計画をとりやめにしたいと望むが，自尊心から言い出せないのである。Gusの存在は，

Bigger に圧迫感を与え，白人への恐怖，劣等感，憎悪のすべての象徴として Bigger に感じられた。どうにもならなくなった圧迫感を解決するには，Gus への強烈な暴力という形しかなかった。Gus との衝突によって，白人の店を襲う計画も消え去り，Bigger 自身の恐怖も悟られずに済んだことで，彼の自己防衛はすべて成功したと言えよう。

> His confused emotions had made him feel instinctively that it would be better to fight Gus and spoil the plan of the robbery than to confront a white man with a gun. But he kept this knowledge of his fear thrust firmly down in him : his courage to live depended upon how successfully his fear was hidden from his consciousness.(3)

Wright は「白」の恐怖が，黒人全体に言い知れない圧迫を与え，さらに黒人同士の仲間関係にまで，影響していると述べているのである。恐怖は黒人，一人一人の肉体に重く入り込み，精神異常さえ来たすほど強大な存在となっていた。黒人にとって恐怖解決の手段は，無関心を装うか，暴力に訴えるしかないのである。他の黒人に打ちあけられる程，簡単な問題ではなく，それほど率直に育っていない事は，いくら同じ人種であっても，自分の恐怖の知られる事を恐れる，Bigger の性格に明確に示されている。黒人は互いに強い恐怖を内在させているからこそ，心からの交りがないのだと Wright は主張していると言えよう。しかしまた，自分一人では何も行動できず，他人の力を借りて行動に移そうとする Bigger から，主体性のない黒人の人間像をも浮き彫りにしている。

Dalton 家へ就職する事は，Bigger にとって今までの概念的な白人への恐怖とは異なって，直接に白人と接触するという事から，危険を伴っていたとも考えられる。恐怖の対象と向かいあう事は，精神の異常がいつ起こるとも限らないわけであり，不安を感じた Bigger がピストルを用意していた事でも察することができる。彼にとってピストルやナイフは十

字架の役割を果していたと考えられる。持っているだけで安心感を得るピストルが，2人の女性殺人に直接関係していない事でも納得できよう。Dalton 家において，Bigger は様々な挑戦的雰囲気を受けた。例えば，黒人が入るべき裏口がない事や，女中の Bigger への見方に動揺し，Dalton 家の家具の一つ一つにも，Biggerは挑戦されているように思うのだった。Dalton 夫妻の会話にも，感じはつかめても内容がわからない事から緊張感を増す Bigger の姿は，実際には何でもない事であっても，あまりに強い劣等感を白人に対し抱いている為に，かえって偏見を持っていると考えられる。それゆえ自己嫌悪を感じてしまうのである。

> He hated himself at that moment. Why was he acting and feeling this way? He wanted to wave his hand and blot out the white man who was making him feel like this. If not that, he wanted to blot himself out.(4)

こうした中においても，白人に対して黒人がどのような態度を取る事が望ましいか Biggerは忘れてはいなかった。 Dalton氏と話しているBiggerは，互いに一つの線を守っているせいか，Bigger の内面に緊張感はあったが，精神は安定していたと考えられる。Dalton 氏に盗みの事を聞かれても，前もって予知していた事であり，平気で嘘をつく事が出来た。Bigger は自分の劣等感を引き出すものを異常に憎むのであって，自分を隠していられれば，安心していたのである。Wrightは白人領域に存在するものすべてに恐怖を抱く Bigger を設定し，黒人の劣等感の強さから自己嫌悪に陥る愚かな黒人を示すことによって，黒人への同情を引き出すだけでなく，白人への強烈な抗議を行なっていると考えられる。こんないじけた人間を育てた社会は，たとえ，建物が立ちならんだ大都会となろうとも，実際には矛盾に満ちた社会であることを告げているのである。

Bigger の精神及び態度には *Black Boy* においての「私」つまりWright自身と，共通している点を見る事が出来る。 白人の好むような態度を

自然に学び，白人の前では進んでその行動を取る。そしてその行動の陰に，自分自身を隠してしまおうとする意識は，Wrightが幼い頃から得た黒人独得の性質だと言える。

圧迫と被圧迫の関係は，長い年月を経て，不満を蓄積させつつ，恐怖という壁の為，不自然な形での均衡が保たれていた。こうした均衡は，互いに領域を犯さないという事で，安定していたのである。しかしMaryの登場と彼女の言動は，この均衡を崩す結果となった。つまり，あまりに唐突なMaryの質問は，Bigger の抱いていた白人娘のimageとは，かなりかけ離れて，まったく予知できなかったばかりか，彼を不安の底へ落とし入れてしまった。Biggerは彼女が自分の内部にまで，侵入して来たように感じ，Dalton家へ就職する事さえ危うくするのではないかと恐れた。不安を抱いた瞬間から憎悪を感じたのは，黒人として当然の反応とも言えよう。自分を隠すだけの余裕がないという事は，直接大きな恐怖を黒人に引き起こすものだ。映画の上での白人女性を，一般の白人と考えてしまうほどの単純さと，共産主義を悪の代表として思い込んでいる無知さは，あまりに一般社会から隔離された黒人の生活を，意識せずにはいられない。

Maryに加えてJanの出現は，新たなWrightの主張を見る事が出来る。共産主義者であろうとなかろうと，JanはBiggerにとって白人であった。仲間であると，宣言するJanは，共産主義の立場からBiggerに接したのであるが，Biggerは黒人としての立場でしか考えられない所に，Janを受け入れられない原因がある。Wrightは，人種の問題がideologyとは別である事を，暗に述べていると考えられる。このBiggerの心理には，JanやMaryの親切さえも否定し，逆に黒い皮膚の色を強く感じさせてしまうほど歪められた黒人を示している。これほどまで，白人を恐れ，劣等感を持っていたBiggerがMaryの隣にすわった時，白人への恐怖と共に女性を意識した事は，不思議とも考えられる。

Never in his life had he been so close to a white woman. He

smelt the odor of her hair and felt the soft pressure of her thigh against his own.[5]

このような姿勢は，New Negro の立場を，より明確にしようとするWright の意志ではないだろうか。さらに Bigger は，泥酔したMaryに対して，白人としての意識や恐怖が薄らいでいき，逆にMaryに sexを意識していったという事は，Wright が意図的に最も白人の嫌う点，人種問題においてタブーと考えられている点を明らかにし，性的欲望を持ったNew Negroを示そうとする意志が理解できよう。ideologyでは越える事の出来ない人種の壁を，性の本能が越えられたのとは逆に，恐怖の本能が，人種の壁を厚くしている事は，矛盾しているようでもあり，また黒人の真の姿でもあると考えられる。

Bigger にとって，最大の恐怖を感じたのは，Maryの部屋で，突然にDalton 夫人と出会った時であった。まったく予期していなかった事に，反射的に恐怖を抱くのは黒人の本能であり，Bigger は Dalton 夫人への増大した恐怖感から，偶然にも Mary を殺害してしまったのであった。Biggerの異常心理は，殺人を犯した恐れよりも，自分の行為が多くの白人から敵視され，無限の力に攻撃される事を恐れるのである。

Maxとの話の中で，Maryの殺害に対しまったく，Bigger は罪の意識を持っていない事がわかる。

Maybe they going to burn me in the electric chair for feeling this way. But I ain't worried none about them women I killed. For a little while I was free.[6]

人を殺しても罪の意識がない Bigger の心理は，無意識の中にも社会の倫理を拒否しており，これも Wright の主張の一つであると考えられる。黒人が白人を殺すのは，自分が殺されない為であるという pattern は，Wright の*Uncle Tom's Children* にも見られる。例えば Big Boy のよう

に，抵抗しなければ自分が殺されてしまうと考え，殺人を犯してしまう事でも明らかで，正当防衛の形をとっているが，Maryを殺害したBiggerは正当防衛と言えないであろうか。 Maryを対象として考えた場合直接Biggerに危害を加えたわけでもなく，殺人は正当とは言えない。しかし，親切心からのMaryの行動はBiggerの心に，危害として感じられていた事は確かである。またアメリカ社会の外的力が，Biggerには，殺される恐れを感じるほどの強い危害となっていたのであろう。 したがってBigger は彼なりに正当防衛であるからこそ，罪の意識をまったく感じていないのである。

恐怖が肉体化していたBiggerにとって，それまで人間性というものとは，まったく無縁であったと言える。しかしMaryの殺害を契機に，精神的圧迫を被った結果となり，彼の精神は一変する。 主体性のなかったBigger がこの殺人により偶然にも主体性を持たざるを得なくなったのである。

Biggerは自分を犯人と知られない為にのみ行動することになるのであるが，彼の殺人直後の処理の仕方，つまり死体の焼却，首の切断などの，証拠隠滅行為から見られる残虐性は，人間悪の悲惨さを感じさせる。その後，彼は殺人を犯した事によって，皮肉にも自分の存在感を味わうこととなった。偶然にせよ，一種の自発的結果は，その責任上，自らで自らの命を左右する立場にBiggerを置いたのだが，この責任という事が，Biggerの今までどうしても求められなかったものであり，この責任感は，むしろ殺人によって，彼の内面に喜びすら感じさせたのである。ここにもアメリカ黒人の異常心理がうかがえる。BiggerはGusとの争いと同様に，暴力に訴えたことで「白」の壁をこえ，自己の存在の証しを，得ることができたのである。そこには法律，道徳，権威に反逆した，一種の孤立した姿を見ることもできる。 Edward Margoliesは，「アメリカの息子たち」の中でBiggerの殺人について次のように述べている。

彼の人間性を否定し，彼の人格を分裂させる，不条理で敵意にあ

ふれた世界にあって，ビッガーは自分の存在をなんらかの形で確たるものとする選択をなしえたのである。(7)

黒人だからこそ，考え方にまで大きな変化をもたらしたのであり，この解釈に同感である。

こうして彼は，生きているという充足感を味わい，今や何からも圧迫感を感じなくなったのである。自分だけが知っている事実を，どのように利用したら犯人として捕えられないか，という事が中心課題となり，Biggerの頭の中は，その目的達成に専念していた。白人が考えている所の，黒人の知恵の基準を，はるかに越えた想像もつかないほどの大それた仕業を，やってのけようとしているのだ。この巧妙な工作は，失敗がすなわち「死」に結びつくという，特殊な状態に直面した人間の必死の才能を示していると言える。今後の行動をどのようにするか，犯人を誰に仕立てるか，家族，友人，Dalton家の人々に対してはどのような態度が必要か…彼の全生活が，今までとは異なった形で考え直されていった。表面的には全然変わっていないかのように，ふるまおうとするBiggerの態度にも，以前のような恐怖からの気迫が見られなかった事は明白である。むしろ周囲の黒人に対して，客観視できるほど冷静になっていたと言える。そこには強大な圧迫から脱した，一種の虚無的姿さえ見る事が出来る。特にここで対象的なBiggerの二面が引き出される点は注目できる。Dalton家にいる時のBiggerがMaryに関する話題の一つ一つに注意し，鋭敏に反応する活動的姿を持っているのに反して，家に戻ったBiggerは，黒人生活の次元から分離して，孤立した存在となり，消極的な姿を持っているという事である。つまりBiggerは内面では黒人としての領域を離れ，白人に対しては，敵対することで存在感を持つわけである。その上，彼を精神的にしろ白人より優位に立たせたのは，白人の知らない現実，Biggerのみ知っている現実があるということなのだ。

殺人行為によって得られた自己存在をあくまで守りぬこうと必死であったBiggerは，恋人Bessieさえ利用する事しか考えなかった。Bessie

と Bigger は互いに本当に愛し合っていたのではなく，ただ利用しあっていただけの結びつきだったのであろう。 Bessie自身も Biggerの犯した罪の為に，一緒に死刑になるような事はしたくなかったと言える。Bigger は単なる欲望を遂げる為に，Bessieを必要としていたのだ。それゆえ，犯人として追跡されている時，無理に性交をした後，足手まといになると考え容易に Bessieを殺すことが出来たのである。このような恐ろしいまでの心理には，自己防衛に必死になっている Bigger の野蛮さ，死に追いつめられた動物的本能を感じ取る事が出来る。

様々な偽装工作も空しく犯人として追われ捕えられた Biggerは，自分をふりかえり，一時的に人間としての存在感を得たが，結局黒人は，非人間に甘んじるのが正しいのではないかと考え， 葛 藤 するのである。Biggerにとって，この結末は，今までの自分の行動をすべて否定することになるのだ。彼の能力を最大限に使って計画を立て，行動したにもかかわらず，今「死」に近づきつつある Bigger は自己の人間としての存在自体が不安になっていった。

Maryの殺害後，一人で何もかも考え行動してきた Biggerにとって，Jan とMaxの登場は，第二の大きな変化をその心理にもたらしたと言える。人間同士の信頼というものを初めて知ったのである。JanはMaryの恋人であり， Bigger を憎んで当然とさえ思われるのにもかかわらず，強烈に白人から非難されている Bigger の弁護に協力しようとし，また白人の恨みすらかうことを承知で，Bigger を救おうとする Janの態度にとまどい，劣等感を完全にぬぐいきれないにしても，以前のような憎悪は姿を消していった。

> A particle of white rock had detached itself from that looming mountain of white hate and had rolled down the slope, stopping still at his feet. The word had become fresh. For the first time in his life a white man became a human being to him.(8)

もはやBiggerは白人を恐怖の対象として，とらえることはなくなった。Janの紹介してくれた弁護士Maxに対して，今まで，自分の生いたち，家族の生活，恋人との関係など，誰にも話した事のない人生を，包み隠さず話す事が出来たのは，信頼という力のなせる業であった。Maxはあくまでも Bigger の人間性を認めていた。たとえ，無宗教であれ，殺人犯人であれ，　そして黒人だといっても人間としてあつかった。 この事でBiggerは自分の心の中に押し込めていた不満，恐怖，憎悪のすべてが解き開かれたように，Maxに話す事が出来たのである。完全に他人を信じる事に不安を感じたのは言うまでもない。Maxと別れた後，すべてを話した事で弱点さえさらけ出してしまったような不安感と，一人ではなくなったのだという安心感が，Bigger に葛藤を引き起こさせた。しかし次第にMaxとの人間的ふれ合いの中で Bigger は信頼感を増していったのである。

この Biggerの態度には，それまで強烈に持っていた恐怖が，あっさり消滅してしまっている。Wright が Communismに近づけようとする意志があまりに表面化していると言える。

Maxの質問に，Bigger は自分にも説明のつかない黒人特有の感情が，彼の大部分の行動を左右していた事がわかった。長年にわたるアメリカの矛盾した社会が黒人に与えた，解釈すらできない感情作用を示していると言えよう。

Bigger は，白人のMaxが，自分の中から人間性を見つけてくれた事によって立場をすり変えたら，白人がなぜ自分を憎悪するのかがわかるのではないかと考えた。この事は後にWrightのアメリカ脱出の考えと一致すると考えられる。自分の立場から離れ，白人の立場で自分を見ようとする Bigger の姿は，自己認識を最も恐れていた以前の彼には，想像も出来ないことだと言える。進んで自己認識しようとするこのようなBiggerの意識の変化は，自分を客観視した上で，これから先の残り少ない生活をどのように送るか，またどのような気持で死に向かうか，という事につながる問題であった。人々とふれ合うことで，彼は自分をより知る事

が出来るとさえ信じていた。

> Not that he wanted those hearts to turn their warmth to him ; he was not wanting that much. But just to know that they were there and warm! Just that, and no more ; and it would have been enough, more than enough. And in that touch, response of recognition, there would be union, identity ; (9)

Bigger はMaxとのふれ合いから，自己認識できると確信していた。自分の死を憎悪や，劣等感や，敗北感で汚したくはなかったのだ。Maxによって，人間として目ざめ，生まれて初めて誇りすら感じる事が出来たことから，Bigger は死ぬ前に，さらに確固たる自己を見つけたかったと言える。

このようなMaxとの結びつきも，裁判の判決で「死刑」が決まった後，二人の間に，心理の上でくい違いが出てくるのである。Max は結局「死」の宣言を受けた Bigger を，もう死ぬ人間としか考えられなくなってしまった。あと6時間後の，死を控えた Bigger は，Max に会う以外，誰とも面会する気持にはなれなかった。自分の生涯を，より確固たるものとし，死をどのように受け取るかのみを一途に自覚したいと望んでいた。自分の内部に確実なものがあるとすれば，Max によって引き出す事が出来ると信じていたのだが，Max の言葉は無意味なものばかりだった。もはや Bigger を理解出来なかったと言える。人生の最後にして知り合い，人間的ふれ合いを感じさせ，Bigger のすべてを知っているはずの Max が，今の Bigger の本心，求めている事を理解出来ないという事は，裏切にも等しい大きな衝撃を与えたと言える。

こうして Bigger は死んで行くのだが，その死が決して満足した死ではなかったことは明白である。結局は表面的にもせよ，白人の強制的力に屈した死であるのだ。内面的にも，Bigger の最後まで求めていた人間性の追求がなし得なかったのである。この事は Bigger の死を，より一層悲

劇的にしていると言えよう。

Wright がこのように最後まで，悲劇的にした裏に，まったく救いのない世界におかれた黒人の言いようのない抗議を見ることが出来る。また Communism との係りの安易さは，Wright がまだ入党していたことからも察せられるが，実際に Communism に対して Wright が求めていたものは，Bigger がMaxに求めていた人間同士のふれ合いと，自己認識だったのではないだろうか。

Native Son において，Wright はアメリカ社会を批判するとともに，様々な問題を投げかけたと言える。黒人の恐怖からの暴力を肯定する Wright の描く Bigger に対し，反発より同情させられ，さらに恐怖を納得させられるのは，Wright の人種差別への抗議が，彼の肉体からにじみ出てくるものであり，その筆が計画的に黒人を正当化する方向に向けられているからであろう。Wright の代弁者とも言えるMaxの言葉から，白人自身の恐怖も知る事が出来る。黒人を虐待した白人は，罪を感じつつ生活しているが，その罪をあくまで隠して，目をそむけている白人にとって，黒人がその罪を感じさせる行動をとると，相手を抹殺してしまおうとする。こうした白人の意識の中に育った黒人は，さらに恐怖を深めつつある事を示して，将来にまで続くことを暗示していると言えよう。

Communism へ傾倒していた Wright は，人間性の追求において Communism と Bigger を結びつけようと試みたが，結局 Wright自身の Nationalism が強かった為に，Bigger の精神内部までは入り込めなかったのである。Bigger によって，黒人の深い恐怖を示すとともに，人間性を求め続けた Wright の姿をも見ることができるのである。

Notes

(1) Richard Wright : *Uncle Tom's Children,* "Long Black Song" 第三章。

(2) Ibid., 第四章で，Silas が一人の白人を殺し，その死体を前にして絶叫した言葉である。

(3) Richard Wright : *Native Son,* p.44.

(4) Ibid., p.49–50

(5) Ibid., p.68.

(6) Ibid., p.328.

(7) Edward Margolies : *Native Sons,* 大井浩二訳「アメリカの息子たち」p.81.

(8) Richard Wright : *Native Son,* p.268.

(9) Ibid., p.335.